

(4) 事業担当・ボランティアより

「人とのつながり」

企画指導専門職 田村 文明

昨年度の限界突破キャンプは副担当として、本年度は主担当としてこの事業に携わることができ、とても光栄に思っています。「自分の力をためしたい」「新たな自分と出会いたい」、今年で2年目になったこのキャンプには、そんな様々な思いを持った小学5年生～中学2年生の児童生徒 23 名が参加しました。今年のテーマは、「自己肯定感」です。子供たちの思いに応え、自己肯定感を高めるために、具体的な手立てとして次のことに取り組みました。

1つ目は、「プログラムデザイン」の工夫です。前半は、仲間作りや野外炊事等で仲間意識を高め、後半は、総距離約50km、累積標高差約3,000mある9つの山を制覇するという困難なことに挑戦する体験をすることで、段階的に自己肯定感を高めるねらいに迫るプログラムにしました。

2つ目は、「振り返りの時間」の充実です。自分の良いところを仲間やスタッフからフィードバックしてもらい「All for One (一人のために)」を取り入れました。肯定的なかかわり合いがあったことで、自己存在感や仲間のために役に立っているなどの実感を得ることができ、自信を持って取り組める力を高めたと考えています。

子供たちにとって、このような体験活動は「楽苦美」であったと信じています。楽しいこと、苦しいことをみんなで分かち合っていくと、あとで振り返ると美しい日々だったと思える。今後、「人とのつながり」を大切にしたい子供たちが、日本の未来を創っていくのだらうと思います。この事業にあたりご協力いただいた関係各位の皆様、保護者の皆様に心より感謝を申し上げます。

「心と体の準備」

企画指導専門職 奈良 貢

今年度、初めてキャンプに関わらせて頂いて、改めて心と体の準備の大切さを感じました。

まずプログラムを自分達で体験すること。ボランティアと連携すること。そして、参加者や保護者の声に耳を傾けること。

心と体の準備を重ねていくことで、このキャンプに携わった全ての人にとって、よりこの経験が大きな意味を持つと感じました。これらの経験が、参加者の大きな自信となり、成長を後押ししていくことを期待しています。

「チーム限界突破」

事業推進係員 山川 晃

限界突破キャンプを開催するために、キャンプの教育目標とプログラム設計についての議論や、行程と注意箇所を確認するための実地踏査、ボランティアとの事前研修など、多くの時間を使って準備してきました。そのような準備を通して、各スタッフが明確な役割を持ち、かつ目標を共有したひとつのチームとしてキャンプを運営することができました。これからも、キャンプの前から良い準備を積み重ね、より良いキャンプを作っていきたいと考えています。

「ボランティアリーダーとして」

群馬大学3年 山本 周吾

今回の限界突破キャンプは2回目の参加となり、ボランティアリーダーという役割で、全体の司会や進行、子供たちへの連絡を伝えることなど多くのことが経験できました。その中で、子供同士の関係性などの全体を見る力を付けられたように思います。運営の職員が決めるのではなく、ボランティアや子供たちに判断を委ねる場面も多く、「どうすれば子供たちにとって一番いいのか」ということを深く考えることができました。

「子供たち一人一人とのコミュニケーションを通して」

新潟大学4年 乙坂まりん

限界突破キャンプでは、登山や野外炊飯などの活動の中で、子供たち一人一人との密なコミュニケーションに努めました。密なコミュニケーションは、子供たちの小さな変化への気づきに繋がることを改めて実感しました。コミュニケーションを重視し、長期で小中学生と共にキャンプをしたことで、個性の細かな理解と、その時々合ったメリハリのある関わりができるようになりました。今後もそのような関わりをしていきたいと思っています。

「寄り添うこと」

上越教育大学大学院1年 松本 直樹

私は「寄り添う」という言葉が苦手です。「子供に寄り添う」とよく耳にしますが、「寄り添うって何？」と聞くと曖昧な回答がくることが多いからです。ですが、このキャンプで考えが変わりました。相手のことを思いやり、先のこと考えた対応。褒めたことも注意したこともありましたが、そのどれもが温かく感じました。スタッフの方の対応、子供たち同士のやりとりのなかに「寄り添う」ことの本質が見えたような気がします。

「子供たちの言動から得る学び」

大東文化大学大学院2年 浅川 健太

私にとって限界突破キャンプは、忘れかけていた大切なものを思い出させてくれるものとなりました。例えば、辛い山登りで仲間を思いやる声かけを送る子から、他者を思いやり行動する大切さについて改めて気づかせて貰いました。このような登山中の辛い時でも仲間に声をかける子たちの姿に強く心を打たれ、自分も同じようにありたいという思いから、相手のために何ができるか考えて行動する機会が増えるようになりました。

「視点の違いを学ぶ」

神奈川大学3年 岡部 和希

登山中ある女の子が「あとどのくらいで頂上？」と聞いてきたので「あと少しだよ」と答えました。その後10分くらいで「全然少しじゃないじゃん！」とその女の子が怒り出してしまいました。その時、自分にとってはあと少しでも子供たちからしてみれば長い距離なのだと思われました。当然のことなのですが、大人と子供では見えている景色が違うのだと実感しました。これからは子供の目線に合わせて寄り添っていきたいと思います。

「子供の成長とともに…」

亜細亜大学3年 中澤 諒哉

私は、人から吸収する力を身につけました。このキャンプが初めてのボランティアだったので、子供たちはもちろん、他のボランティアを見ながら、どうしたら効率よく動けるのかを考えながら過ごしました。班付きではなく、子供の指導もしたことがなかったので、先輩ボラの指導や話口調を見たり聞いたりする機会が多く自分の中で手本としていました。これから初めての経験はたくさんあると思うので、この経験を生かして自分自身をもっと成長させていきたいです。

御支援をいただいた皆様

本事業を実施するにあたり、たくさん関係機関や推進委員の皆様のおかげで事業が無事に終わることができました。心より感謝申し上げます。

○募集協力

上毛新聞社：新聞掲載日～6月16日(日)

○取材協力

群馬テレビ：放送日～①8月3日(土) ②8月7日(水) ③8月22日(木)

○後援

群馬県教育委員会・前橋市教育委員会